「東西南北の人」について
―杜甫と高適の酬和詩を中心に―

後藤秋正

はじめに

洪邁『容斎随筆』巻十六、「和詩当和意」の条に、次のように言っている。

古人酬和詩、必答其来意。非若今人為次韻所局也。……唐人尤多、不可具載。姑取杜集数篇、略紀于此。高適寄杜公云、媿爾東西南北人、杜則云東西南北更堪論、……。皆如鐘磬在簨、扣之則応、往来反復、於是乎有余味矣。

古人　酬和の詩は、必ず其の来意に答う。今人の次韻の局る所と為るが若きに非ざるなり。……唐人は尤も多く、具さには載す可からず。姑く杜集の数篇を取り、此に略紀す。高適は杜公に寄せて云う、媿ず爾東西南北の人にと、杜は則ち云う東西南北更に論ずるに堪えんやと、……。皆な鐘磬の簨に在るが如く、之を扣けば則ち応ず、往来反復、是に於いてか余味有り。

古人が酬和した詩は、「来意」に答えた内容になっており、宋人がもっぱら「次韻」してこと足れりとしているのとは異なる、というのである。

ここに唐人の「酬和詩」の実例として挙げられている、高適と杜甫の場合に着目したい。これが「酬和詩」の典型と言えるものかどうかについては検討を要するにしても、ともに「東西南北（人）」の語が用いられており、対応関係が分かりやすい。高適の「人日寄杜二拾遺」（『高常侍集』巻七、『杜詩詳注』巻二三。以下、『詳注』と略称）は次のように詠じられる。

人日題詩寄草堂　人日　詩を題して草堂に寄す
遥憐故人思故郷　遥かに憐れむ　故人　故郷を思うを
柳条弄色不忍見　柳条は色を弄して見るに忍びず
梅花満枝空断腸　梅花は枝に満ちて空しく断腸

身在南蕃無所預　身は南蕃に在りて預かる所無く
心懐百憂復千慮　心に懐く　百憂復た千慮
今年人日空相憶　今年の人日　空しく相い憶う
明年人日知何処　明年の人日　知んぬ何れの処ぞ
一臥東山三十春　一たび東山に臥して三十春
豈知書剣与風塵　豈に知らんや書剣と風塵とを
竜鍾還忝二千石　竜鍾　還た忝なくす二千石
媿爾東西南北人　媿ず爾　東西南北の人に

この詩は、例えば劉開揚『高適詩集編年箋注』（中華書局、一九八一）の「年譜」が、上元二年（七六一）に繋けているように、上元元年に彭州刺史から蜀州刺史に遷された高適が、その翌年の正月七日に蜀州（四川省崇州市）から杜甫に寄せたものである。杜甫は乾元二年の年末に成都に着き、翌年から成都西郊の浣花渓のほとりに草堂を営み始めていた。上元元年の人日には草堂は未完成なので、上元二年の作と考えられるのである。ただし、杜甫はこの年のはじめには新津（四川省新津県）に行っていたから、高適の詩をただちに読んだわけではない。杜甫が酬和した詩を送ることができなかったのは、この辺の事情が関わっている。洪邁が引いている七言二十四句からなる答詩「追酬故高蜀州人日見寄」（『詳注』巻二三）は、大暦五年（七七〇）に潭州（湖南省長沙市）で書かれたものである。「追酬」した事情はこの詩の序を見ればはっきりする。

開文書帙中、検所遺忘、因得故高常侍適、往居在成都時、高任蜀州刺史、人日相憶見寄詩、涙灑行間、読終篇末。自枉詩已十余年、莫記存没又六七年矣。老病懐旧、生意可知。今海内忘形故人、独漢中王瑀与昭州敬使君超先在。愛而不見、情見乎辞。大暦五年正月二十一日却追酬高公此作、因寄王及敬弟。

文書の帙中を開き、遺忘する所を検し、因りて故高常侍適の、往に成都に居在せし時、高　蜀州刺史に任ぜられ、人日　相い憶いて寄せられし詩を得て、涙行間に灑ぎ、読みて篇末に終わる。詩を枉げられしより已に十余年、存没を記す莫きこと又六七年。老病旧を懐う、生意　知る可し。今　海内　忘形の故人は、独り漢中の王瑀と昭州の敬使君超先と在るのみ。愛すれども見えず、情は辞に見ゆ。大暦五年正月二十一日却って高公の此の作に追酬し、因りて王及び敬弟に寄す。

自蒙蜀州人日作　蜀州の人日の作を蒙りしより
不意清詩久零落　意わず清詩　久しく零落せんとは
今晨散帙眼忽開　今晨　帙を散じて眼忽ち開き

迸涙幽吟事如昨　涙を迸らせ幽吟するに事は昨の如し
……　……
東西南北更誰論　東西　南北　更に誰か論ぜん
白首扁舟病独存　白首　扁舟　病みて独り存す
……　……
長笛隣家乱愁思　長笛　隣家　愁思を乱る
昭州詞翰与招魂　昭州の詞翰　与に魂を招かん

杜甫が高適の詩を得てからすでに九年、高適が長安に戻り、永泰元年（七六五）正月に病没してから数えても五年が過ぎていた。

先に述べたように、杜甫の詩の「東西南北」の語が高適の詩を踏まえていることははっきりしている。それでは、この語にはどのような含意があるのだろうか。以下、この点について詳しく見てゆきたい。

一

杜甫「謁文公上方」（『詳注』巻一一）には、次のような句がある。

甫也南北人　甫や南北の人
蕪蔓少耘鋤　蕪蔓　耘鋤少なし
久遭詩酒汙　久しく詩酒の汙すに遭う
何事忝簪裾　何事ぞ簪裾を忝なくせん

この詩は、『詳注』に引く黄鶴の説によると、宝応元年（七六二）、梓州（四川省三台県）で作られた。この年の七月、厳武が朝廷に徴されたのを送って綿州まで行った時に徐知道の叛乱が起こって成都に帰れなくなった。梓州に移ったのは晩秋である。この時に蜀州刺史であった高適が厳武に代わって成都尹として赴任していた。杜甫が、厳武が成都尹兼剣南東西川節度使として成都に着任したことを聞き、閬州（四川省閬中市）を経て草堂に戻ったのは、広徳二年（七六四）の暮春のことである。

『詳注』が「南北の人」に注して『礼記』を引いているように、この語が『礼記』を踏まえて、杜甫が故郷、もしくは成都の寓居である草堂を離れた旅の身であることを言っていることは確かである。『礼記』檀弓上には、「孔子既得合葬於防。曰、吾聞之、古也墓而不墳。今丘也東西南北之人也。不可以弗識也。於是封之。崇四尺。」（孔子　既に防に合葬するを得たり。曰く、吾　之を聞く、古は墓して墳せずと。今　丘や東西南北の人なり。以て識さざる可からざるなりと。是に於いて之を封ず。崇さ四尺。）と言う。鄭注は「東西南北、言居無常処也。」（東西南北とは、居に常処無きを言うなり。）と記す。これが「東西南北の人」

の早い用例であろう。ここでは、放浪して定まった住居を持たない人の意で用いている。この一文は『漢書』巻三十六、劉向伝にある、劉向の成帝への上疏[1]にもほぼそのまま見えている。しかし、顔師古の注は、「東西南北、言周遊以行其道、不得専在本邦。」（東西南北とは、周遊して以て其の道を行い、専ら本邦に在ることを得ず。）と述べて、孔子が母の墓参のために魯にもどれない理由を、各地を巡り歩いて道を広めているためであるとしている。つまり、『礼記』の一文については、かなり早い時期から二種類の解釈が存在したことになる。

唐代以前の詩には、この語は見られない。強いて類似した例を挙げるならば、鮑照「擬行路難十八首」〈其三〉（『全宋詩』巻七）に、水が「東西南北」に流れることを人生に喩えて、次のように言う。これが詩において「東西南北」の語を用いた最初の例であろう。

瀉水置平地　水を瀉(そそ)いで平地に置けば
各自東西南北流　各自　東西南北に流る
人生亦有命　人生も亦命有り
安能行歎復坐愁　安くんぞ能く行くゆく歎じ復た坐して愁えん

唐代に入ってもこの語の用例は少ない。

王勃「夏日登韓城門楼寓望序」（『王子安集』巻五）に、「下宮狂走不調、東西南北之人也。流離歳月、羈旅山川。輟仙駕於殊郷、遇良朋於異県。」（下宮　狂走して調(やわら)がず、東西南北の人なり。歳月に流離して、山川に羈旅す。仙駕を殊郷に輟(とど)め、良朋に異県に遇う。）と言っている。制作時期ははっきりしないが、「韓城」、「下宮」の語から考えて、咸亨四年（六七三）に虢州参軍となり、翌上元元年、官奴の曹達を殺して除名されるまでの期間に書かれたものではなかろうか。そうであるとすれば、この「東西南北の人」は、官についたものの周囲と調和せずに奔走している中、韓城（陝西省韓城市）に立ち寄った時の落ち着かない心境を述べた語ということになる。

高適には先に引いた詩のほかに、「訓秘書弟兼寄幕下諸公并序」（『高常侍集』巻七、『全唐詩』巻二一一）の序に、「……族弟秘書、雁序之白眉者。風塵一別、俱東西南北之人。」（……族弟秘書は、雁序の白眉なる者なり。風塵に一別して、俱に東西南北の人たり。）と言う。序文によればこの詩は、封丘（河南省封丘県）の尉であった高適が、天宝九年（七五〇）の秋、吏卒を率いて清夷軍（河北省懐来県）に使いする途中で書かれた。詩中に、「客従梁宋来、行役随転蓬、酬贈欣元弟、憶賢瞻数公」（客　梁宋より来

たり、行役して転蓬に随う、酬贈　元弟を欣び、賢を憶いて数公を瞻る）とあるから、序文の「東西南北の人」が、地方官として東奔西走の日々を送っている自分と族弟（元弟）を指していることは間違いない。

次にこの語が見えるのは、時代は下るが、大中八年（八五四）の進士である李頻の「過四皓廟」（『黎岳集』、『全唐詩』巻五八八）であろう。

東西南北人　東西南北の人
高跡自相親　高跡　自ずから相い親しむ
天下已帰漢　天下　已に漢に帰するも
山中猶避秦　山中　猶お秦を避く
竜楼曾作客　竜楼　曾て客と作るも
鶴氅不為臣　鶴氅　臣と為らず
独有千年後　独り千年の後
青青廟木春　青青たり廟木の春

四皓廟は万年県（西安市の東北）にあった。宋敏求撰『長安志』巻十一、万年県の条に、「四皓廟、在終南山。去県五十里、唐元和八年重建。」（四皓廟は、終南山に在り。県を去ること五十里、唐の元和八年に重建す。）とあるから、李頻が訪ねたのは、元和八年（八一三）に重建されたものであっただろう。李頻は睦州寿昌（浙江省建徳市）の人だが、登第以前には長安近辺だけでなく、陝州や蜀地にまで足を伸ばしていたから、そのような自分を指して「東西南北の人」と言ったものである。

もう一例は、崔道融「楊柳枝詞」（『全唐詩』巻七一四、『万首唐人絶句』巻四七）に見えている。

霧撚烟搓一索春　霧撚り烟搓みて一たび春を索む
年年長似染来新　年年　長に染り来って新たなるが似し
応須喚作風流線　応に須く喚びて風流の線と作すべし
繫得東西南北人　繫ぎ得たり東西南北の人

芽吹いたばかりの楊柳のしなやかな美しさが、東西南北を旅する人々の歩みを止めさせる、と言うのである。

つまり、唐代までの用例では、この語は『礼記』鄭注の解釈の範囲を出るものはなく、顔師古の注でもって解釈するほうがふさわしい用例を見出すことはできない。

二

さて、ここで高適と杜甫の詩の贈答関係がどのようになっているか、杜甫が秦州に着いて以後の詩について整理しておこう。[2]

高適が杜甫に贈った詩には、「人日寄杜二拾遺」のほか、

「贈杜二拾遺」（『高常侍集』巻八、『詳注』巻九）がある。

「贈杜二拾遺」について、『高適詩集編年箋注』は、「此詩作於草堂経営以前、為乾元二年（七五九）十二月適在彭州作。」と言う。詩中に「仏香」「僧飯」などの語が見えるので、杜甫が年末に成都西郊の草堂寺へ入ったことを知ってただちに贈ったものであることがわかる。この詩に酬和したのが杜甫「酬高使君相贈」（『詳注』巻九）であり、次のように詩っている。

古寺僧牢落　古寺　僧は牢落たり
空房客寓居　空房　客は寓居す
故人供禄米　故人　禄米を供し
隣舎与園蔬　隣舎　園蔬を与う
双樹容聴法　双樹　法を聴くことを容れ
三車肯載書　三車　肯て書を載す
草玄吾豈敢　玄を草すること吾豈に敢えてせんや
賦或似相如　賦は或いは相如に似ん

この詩は、先に引いた『容斎随筆』が指摘していたように、高適の詩の尾聯、「草玄今已畢、此外復何言」（玄を草すること今已に畢る、此の外　復た何をか言わん）を念頭に置いていて、諧謔味を帯びたものになっている。

では、杜甫が高適に贈った詩はどうであろうか。杜甫が送別し寄贈し、あるいは酬和した詩は、天宝十一載（七五二）冬、河西節度使哥舒翰の書記となり、ともに入朝していた高適が河西に帰るのを送った「送高三十五書記十五韻」（『詳注』巻二）を始めとして、高適の死後に書かれた「聞高常侍亡」（『詳注』巻一四）、「追酬故高蜀州人日見寄并序」（『詳注』巻一三）を含めて、十二篇が数えられる。このうち、杜甫が秦州と蜀地滞在中に作った詩は、以下の七篇である。[3] 以下、制作時期の順に挙げていこう。

①「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史参三十韻」（『詳注』巻八）

乾元二年（七五九）秋、秦州（甘粛省天水市）での作。中間部分には、次の句があり、杜甫一家の窮状を訴える。

何太竜鍾極　何ぞ太だ竜鍾極まる
於今出処妨　今に於いて出処妨げらる
無銭居帝里　銭の帝里に居るべき無く
尽室在辺疆　室を尽くして辺疆に在り

また末聯に、「会待妖雰静、論文暫裹糧」（会ず妖雰の静かなるを待ち、文を論ずるに暫く糧を裹まん）と言っているから、彭州（四川省彭州市）の刺史となっていた高適は、杜甫が成都に来ることを予期していたと思われる。

②「因崔五侍御寄高彭州一絶」（『詳注』巻九）

上元元年（七六〇）、崔侍御を通じて彭州刺史の高適に寄せた詩である。転・結句に、「為問彭州牧、何時救急難」（為に問え彭州の牧、何れの時か急難を救わんやと）と言い、「飢寒」からの救済を訴えている。

③「奉簡高三十五使君」（『詳注』巻九）

上元元年（七六〇）の秋に、彭州刺史から蜀州刺史に遷っていた高適に寄せた詩である。頸・尾聯に、

行色秋将晩　行色　秋将に晩れんとし
交情老更親　交情　老いて更に親し
天涯喜相見　天涯　相い見て
披豁対吾真　披豁　吾が真に対するを喜ぶ

と言っている。彭州で高適との対面を果たした杜甫は、まもなく草堂に帰った。

④「王十七侍御掄、許携酒至草堂、奉寄此詩便請邀高三十五使君同到」（『詳注』巻一〇）

上元二年（七六一）冬、成都での作。侍御史の王掄に、高適とともに草堂を訪ねてほしいと依頼した詩である。尾聯では高適を山簡に喩えている。

戯仮霜威促山簡　戯れに霜威を仮りて山簡を促し
須成一酔習池迴　須く一酔を成して習池を迴るべし

⑤「王竟携酒、高亦同過、共用寒字」（『詳注』巻一〇）

先の詩（④）に応えて、高適が王掄とともに杜甫の草堂を訪問した。この詩でも、杜甫は高適を山簡に喩えて、以下のように言っている。

移樽勧山簡　樽を移して山簡に勧む
頭白恐風寒　頭白　恐らくは風寒ならん

⑥「警急」（『詳注』巻一二）

原注に、「高公適領西川節度。」（高公適　西川節度を領す。）と言う。広徳元年（七六三）十月、吐蕃が奉天、武功から長安にまで侵攻し、代宗が陝州に逃れるという事態が起こった。この詩は高適に、吐蕃との和睦など考えずに警戒すべきことを進言した詩である。郭子儀らの反撃によって吐蕃は退却したものの、十二月には、成都の北西にある松州と維州を陥落させる。西川節度使であった高適は出兵して牽制しようとしたが、失敗に終わった。杜甫は前年の七月、厳武が長安へ召還されるのを送って綿州（四川省綿陽市）まで行っていたが、成都で徐知道の反乱が起こったために帰れず、詩を書いた十月には閬州に留まっていた。

⑦「奉寄高常侍〔一作「寄高三十五大夫」〕」（『詳注』巻一二）

広徳二年（七六四）春、刑部侍郎・左散騎常侍として長安へ帰る高適に寄せた詩である。

汶上相逢年頗多　汶上　相い逢う年頗る多し
飛騰無那故人何　飛騰　故人を那何(いかん)ともする無し
……　……
天涯春色催遅暮　天涯の春色　遅暮を催す
別涙遙添錦水波　別涙　遙かに添う錦水の波

長安へ帰った翌永泰元年正月、高適は病没する。これを伝え聞いた杜甫は「聞高常侍亡」（『詳注』巻一四）を作ってその死を哭した。

三

高適が杜甫に宛てた詩がほかにも残されていれば事情はよりはっきりするのだが、ここまでに見た二人の酬和詩からは、次のようなことが言えるであろう。

確かに洪邁が指摘していたように、二人の詩においては、杜甫が高適の「来意」に答えた内容になっている。それは高適が杜甫に寄せた二篇の詩とも同様である。

ここでもう一度、高適の「人日寄杜二拾遺」と杜甫の「追酬故高蜀州人日見寄」に戻って検討を加えてみよう。「人日寄杜二拾遺」には、「竜鍾還忝二千石」の句が見えていることに留意したい。これは、杜甫「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史参三十韻」の第三十一句「何太竜鍾極」を意識したものではなかろうか。この詩は、乾元二年の秋から冬にかけて作られたことは確実である。高適が彭州刺史として着任したのは、乾元二年の夏[1]であり、岑参が虢州長史となったのも乾元二年の夏のことである。杜甫はこの年の晩秋には、四ヶ月たらずの秦州滞在を終えて同谷（甘粛省成県）へ移ろうとしていた。杜甫の詩の原注に「時患瘧病。」（時に瘧病を患う。）と言うように、経済的な困難ばかりでなく、「瘧疾」も抱えていた。「竜鍾」とは、年老いて病気がちなさま、あるいは前途の見通しが立たずに困難な状況にあるさまを表す擬態語である。杜甫のこの詩を受け取った高適が、「人日寄杜二拾遺」で「竜鍾還忝二千石」と言ったのは偶然ではない。つまり、杜甫が「竜鍾」の語を用いて窮状を訴えて寄こしたのに対して、高適は老いぼれの身でありながら、杜甫とは違って刺史の地位を授けられていると言ったのである。ちなみに、「竜鍾」の語は、高適、杜甫の詩文においては、それぞれにこの一例しか見られない。

では、「東西南北の人」と「南北の人」についてはどうであろうか。

まず杜甫が、宝応元年（七六二）梓州での作「謁文公上方」において、「甫や南北の人」と表現した。これは、高

適の「詶秘書弟兼寄幕下諸公幷序」の語を念頭に置いたものであろう。高適の場合は「詶秘書弟兼寄幕下諸公幷序」でも見てとれるように、職務との関係で各地を旅するといった含意があるようである。高適の「人日寄杜二拾遺」にしても、自身は官職に拘束されている、杜甫は官職にこそ拘束されてはいないものの放浪・寓居の身である、というのであろう。清・徐増『説唐詩』は高適「人日寄杜二拾遺」について、以下のように指摘する。

……竜鍾還忝二千石、竜鍾、竹名、言人衰老之態、如竹之枝葉揺曳、不能自禁持也。太守禄秩二千石、適時刺蜀州。忝者、無刺史之才能、而居刺史之爵位、言不能薦引。愧爾東西南北人、言子美依止無定、心甚愧之。

……竜鍾　還た二千石を忝なくすは、竜鍾とは、竹の名、人の衰老の態、竹の枝葉　揺曳して、自ら禁持すること能わざるが如きを言う。太守の禄秩は二千石、適は時に蜀州に刺たり。忝なくすとは、刺史の才能無くして、刺史の爵位に居り、薦引する能わざるを言う。愧ず爾東西南北の人とは、子美は依止　定め無し、心に甚だ之を愧ずるを言う。

高適が杜甫を「薦引」できないことを申し訳なく思っていたと見なす点については議論の余地があるが、「東西南北の人」を、「依止　定め無し」と解するのは妥当であろう。(3)

杜甫「追酬故高蜀州人日見寄」の「東西南北更誰論」の句が、高適「人日寄杜二拾遺」を踏まえた句であることは諸書に指摘があったとおりである。つまり、杜甫が同谷に移るころに書いた「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史参三十韻」の語を意識して、高適が「人日寄杜二拾遺」を杜甫に寄せ、さらに杜甫は高適の没後、「人日寄杜二拾遺」を念頭に置いて「追酬故高蜀州人日見寄」を書いたということになる。

四

杜甫の「南北の人」について、『高適集編年箋注』は、「唐汝詢『唐詩解』巻一六、『唐詩別裁』説同」として、「苟竜鍾而守此二千石、孰若遨遊四方哉。以此不能無愧於君耳。」（苟くも竜鍾にして此の二千石を守る、四方に遨遊すると孰若れぞ。此れを以て君に愧ずる無きこと能わざるのみ。）という説を引く。高適が刺史の官職に縛られているのに対して、自由に遊び楽しんでいる杜甫に恥ずかしい、というのである。果たして、このような解釈が容れられる

余地はあるのであろうか。最後にこの点について検討しておきたい。

杜詩において方角を表す「東西南北」、あるいは「東西」などの語はどのように用いられるのか、簡単に見てみよう。

まず、「東西南北」（「追酬故高蜀州人日見寄」を除く）と「南北東西」の語には、次のような例がある。

東西南北百里間　東西南北　百里の間
髣髴蹴踏寒山空　髣髴たり蹴踏　寒山空しきに
（「冬狩行」『詳注』巻一二）

今春喜気満乾坤　今春　喜気　乾坤に満ち
南北東西拱至尊　南北東西　至尊に拱す
（「喜聞賊盗蕃寇摠退口号五首」〈其五〉『詳注』巻二一）

「東西」の語の用例は多い。何例か挙げてみよう。

縦有健婦把鋤犂　縦い健婦の鋤犂を把ること有るも
禾生隴畝無東西　禾は隴畝に生じて東西無からん
（「兵車行」『詳注』巻二）

断絶人烟久　断絶　人烟久しく
東西消息稀　東西　消息稀なり
（「憶弟二首」〈其二〉『詳注』巻六）

我里百余家　我が里　百余家
世乱各東西　世乱れて各おの東西す
（「無家別」『詳注』巻七）

川合東西瞻使節　川　東西を合し使節を瞻る
地分南北任流萍　地　南北を分かち流萍に任す
（「厳中丞枉駕見過」『詳注』巻一一）

過客径須愁出入　過客も径ちに須く出入を愁うべし
居人不自解東西　居人すら自ら東西を解せず
（「将赴成都草堂途中有作、先寄厳鄭公五首」〈其三〉『詳注』巻一三）

束帯還騎馬　束帯して還た馬に騎り
東西却渡船　東西　却って船を渡す
（「帰」『詳注』巻一九）

このほかに、次のような例もある。

鱗介腥臚素不食　鱗介の腥臚なるは素より食らわず
秋日忍飢西復東　秋日　飢えを忍びて西し復た東す
（「白鳧行」『詳注』巻二三）

これらの中では、「厳中丞枉駕見過」のように、「東西」と「南北」とを対にしている句もあるが、方角や場所を言う例のほかに、「無家別」のように、戦乱の結果、人々が各地に逃れていくことを言う例、「白鳧行」のように飢えに耐えて放浪することを言う例のあることが注意される。

「西東」はすべての例を挙げよう。

青囊仍隠逸　青囊　仍お隠逸
章甫尚西東　章甫　尚お西東
（「奉寄河南韋尹丈人」『詳注』巻一）

明朝牽世務　明朝　世務に牽かれ
揮涙各西東　涙を揮って各おの西東せん
（「酬孟雲卿」『詳注』巻一八）

谷口子真正憶汝　谷口の子真　正に汝を憶う
岸高瀼滑限西東　岸高く瀼滑らかにして西東を限る
（「江雨、有懐鄭典設」『詳注』巻一八）

此身漂泊苦西東　此の身漂泊　西東に苦しみ
右臂偏枯半耳聾　右臂は偏枯し半耳は聾す
（「清明二首」〈其二〉『詳注』巻二二）

これらの中では、「江雨、有懐鄭典設」が、西と東のそれぞれ別の場所に限られていて逢うことができないと言うのを例外として、他の例は、あてどもなく各地をさまようさま、西と東に別れゆくこと、あるいは漂泊する様子を述べるというように、別離、流浪といったイメージをともなって用いられている。

「東北」は、次の詩では、夔州から見て東北にある、洛陽の方角を指して用いられる。

所思注東北　所思　東北に注ぐ
深峡転脩聳　深峡　転（うた）た脩聳なり
（「晩登瀼上堂」『詳注』巻一八）

「西南」はどうか。

支離東北風塵際　支離たり東北　風塵の際
漂泊西南天地間　漂泊す西南　天地の間
（「詠懐古跡五首」〈其一〉『詳注』巻一七）

この例は「東北」と対になって、明らかに東西南北を「漂泊」することを言う。最後に「南北」はどうか。この語は「謁文公上方」にも見えていた。

我生苦飄蕩　我が生　飄蕩に苦しむ
何時有終極　何れの時か終極有らん
……　……

是身如浮雲　是の身　浮雲の如し
安可限南北　安くんぞ南北を限るべけん
（「別賛上人」『詳注』巻八）

浮雲と同様の身である杜甫の漂泊する方角は「南北」だけには限られていないと言うのであって、この例も「飄蕩」のイメージと密接に関連している。

以上の用例から見てとれるのは、杜甫は方角を指し示す語を用いるときに、自由気ままに旅するというイメージを

帯びてこれを用いることは皆無であるということである。

おわりに

最後に、高適「人日寄杜二拾遺」の末句に言及するいくつかの解釈を検討して、まとめとしたい。

斎藤晌『唐詩選上』（漢詩大系六、集英社、一九六四）は、「束縛のない身で自由に東西南北に放浪される君に対して、深くはずかしく思っている。」と言う。目加田誠『唐詩選』（新釈漢文大系一九、明治書院、一九六四）は、「東西南北人」の語釈に、「心のままに所々を放浪する人。」と言う。また、高木正一『唐詩選下』（新訂中国古典選一五、朝日新聞社、一九六六）は、「東西南北、自由に放浪する貴君にたいして、まことにおもはゆい次第だ。」と言い、前野直彬『唐詩選（上）』（岩波文庫、一九六一）は、「東西南北人」の語釈で、「各地を放浪する人。……家も官職もないが、同時に自由の身の上でもある。」と言う。

向島成美「東西南北の人」（『漢詩のことば』大修館書店、一九九八所収）は、高適と杜甫の「東西南北の人」について詳細に検討を加えており、高適の「竜鍾」の二句について次のように指摘する。[6]

前の句は、高適が老残の身でいまなお俸禄二千石の地方官を拝命していることをうたうもの、そして後の句で杜甫を「東西南北の人」と評して、その生き方に恥じ入るばかりだとうたっている。……高適の杜甫評たる「東西南北の人」には、旅人であると同時に、役人としての束縛を離れた自由人という意味合いが込められていようから、もとの『礼記』のそれとはニュアンスの面で変化が認められる。

さらに一海知義「東西南北と東南西北―日本と中国の方位」（『漢詩逍遙』藤原書店、二〇〇六所収）は、「人日寄杜二拾遺」の末尾の句を訳して、次のように言う。

……しょぼくれたこの年齢（とし）になって、また地方長官の年俸をいただく身となり、杜甫君、君のごとく東へ西へ、南へ北へと諸国を放浪する自由さに対し、まことに面映（おもはゆ）い次第だ。

これらの解釈は、杜甫を自由人と見なしている点ですべて共通している。

果たして「東西南北の人」を、「束縛のない身で自由に東西南北に放浪される君」、あるいは「役人としての束縛を離れた自由人」、「東へ西へ、南へ北へと諸国を放浪する自由さ」などとする解釈は成立するのであろうか。これらの解釈は、高適が、杜甫から寄せられた「寄彭州高三十五

使君適虢州岑二十七長史参三十韻」において窮状を訴えていることを念頭に置いたうえで「人日寄杜二拾遺」を書いていることを軽視しているのではなかろうか。「奉寄高常侍」の『詳注』に引く『杜臆』が、「高・杜交契最久、故贈詩不作諛詞。」（高・杜の交契は最も久し、故に贈詩に諛詞を作さず。）と述べているように、交際期間の長い二人の詩の酬和においては、互いに阿諛する必要はなかったはずである。高適が杜甫一家の困窮ぶりを知りながら、自由の身であることがうらやましいと言ったとするならば、それは杜甫にとって、まったく慰労にはならない。

仮にもう少し「東西南北人」の句の解釈の幅を拡大するとしても、杜甫は放浪の身の上であるからこそ、不遇ではあるが詩作は充実している、という含意を読みとるのが限度ではなかろうか。例えば、蔡正孫『詩林広記』巻七には、賈島の七絶「渡桑乾」(7)を載せ、謝枋得（疊山）の、「謝疊山云、非東西南北之人、不能到此。」（謝疊山云う、東西南北の人に非ずんば、此に到る能わずと。）という評語を引いている。賈島が故郷を遠く離れて旅する身であったからこそ、詩作が充実していると言うのである。「東西南北の人」であることが、文学的な成就の面では、プラスに作用することもあるのである。

注

(1) 『全漢文』巻三六は、「諫嘗昌陵疏」として収める。

(2) 詩の検索には、呉汝昱主編『唐五代人交往詩索引』（上海古籍出版社、一九九三）を用い、制作時期については、劉開揚『高適詩集編年箋注』（中華書局、一九八一）、『詳注』によった。

(3) 『唐五代人交往詩索引』には見えないが、このほかに、「寄高適」（『詳注』巻一一）がある。『詳注』は宝応元年（七六二）秋、梓州にいた杜甫が、厳武に代わって成都尹となった高適に寄せた詩であるとしているが、偽作説もあってはっきりしない。

(4) 高適「同河南李少尹畢員外宅夜飲、時洛陽告捷、遂作春酒歌」（『高常侍集』巻八）に、「前年持節将楚兵、去年留司在東京、今年復拝二千石、盛夏五月西南行」（前年　節を持して楚兵を将い、去年　留司して東京に在り、今年　復た拝す二千石、盛夏　五月西南に行く）と言う。

(5) 『高適詩集編年箋注』は徐増の説を「附会」とする。

(6) なお杜甫の詩の「東西南北」の二句については、「ただ杜甫のいう『東西南北』には、高適のいうような自由人としての旅人を誇る気分はなさそうだ。」と指摘している。高適が杜甫を「自由人としての旅人」と見なしていたかは疑問だが、杜甫にはそれを「誇る気分」がなかったという見方は首肯できる。

(7) 詩は以下の通り。「客舎幷州三十霜、帰心日夜憶咸陽、無端更渡桑乾水、却指幷州是故郷」(幷州に客舎すること三十霜、帰心　日夜　咸陽を憶う、端無くも更に桑乾の水を渡る、却って幷州を指させば是れ故郷)

〔付記〕本研究は平成二〇年度科研費・基盤研究（C）「杜甫の詩語に関する基盤的研究」(課題番号一九五二〇二八五)の助成を受けたものである。

(北海道教育大学札幌校)